

## 史料紹介

エリザベス・ギヤスケル

『マイ・ダイアリー』④

## 笹川真理子 訳

一八三七年 十二月九日

一年ぶりに書くのは、全く恥ずかしい思いがします。それには確かに、悲しい訳があったのです。私は一八三七年二月五日にかわいいミータが生まれるまで、とても健康がすぐれず、ナッツフォードに呼び戻された時にも(三月十日)、まだ元気を回復していませんでした<sup>(1)</sup>。私の母以上の人である最愛のラム伯母さんが、三月八日の水曜日、中風の卒中で倒れたのです。私は二人の幼い娘達と召使いのベツシーと一緒に八週間の間、ナッツフォードの宿に泊っていました。そして五月一日、私は最良の友を失ったのです。あの方が私に示して下さったあらゆる親切に対して、神が報いて下さいますように！

その後しばらくの間、私は大変体の調子が悪く、七月にはタロ

スビーへ行きました。九月に、ウィリアムと私は、マリアンヌを<sup>(2)</sup>ベツシー・ホランドに、ミータをディーン夫人にあずけて、三週間ウェールズへ行きました。それは、私達が召使いのベツシーを失ってしまったからなのです。ベツシーはお姉さんがなくなったために彼女が家に必要となり、私達の所を去らざるをえなかったのです。でも、私達は彼女をずっと友達と想っていますし、彼女はこの秋数週間、私達と一緒に過ごしたりもしました。彼女の後には、利発な召使いのエリザベスがきました。彼女は子ども達に対して、特に小さなミータにはとても優しくしてくれます。私は家庭関係におけるこのようなささいな変化の話をしますが、これも、もしこの本が私の死後(そう私は望んでいるのですが)マリアンヌに渡された時には、あの娘は、私が時々何気なく言っていたことも十分に理解してくれるかもしれません。

私の最愛の伯母さんがこの家を最後に去った際に(一八三七年

一月十五日)、伯母さんはマリアンヌをナッツフォードへ連れて帰り、私の近づいたお産の間中、マリアンヌと一緒にいたのです。ラム伯母さんの視力は大変弱っていたので、伯母さんは手紙が書けませんでした。そこで私は、私のかわいい子の話を、格別な話は何も、そして健康についての普通のたよりでさえ、聞くことができなかったのです。しかしそれ以来、私はいとこ達などに、マリアンヌがラム伯母さんと、伯母さんが最後の病に襲われるまで一緒に過ごした七週間の間起こった、目立ったことはすべて、私に話してほしいと頼みました。彼らは、ラム伯母さんが「彼女の小さなマリアンヌ」をとともかわいがっていたようだと、言っています。

ある日、誰かが外で伯母さんに会いました。伯母さんは、外出して一時間位になり、こんなに長い時間マリアンヌを置いてきたことはないと思うので、家へ急いでいる所なんですよ、と言いました。その幼い子は、ラム伯母さんのベッドの側の小さなベッドで眠っていました。ラム伯母さんは、怒ぎわであの娘を膝にのせてすわり、愛に満ちたちよとした楽しいお話をいっばいかわしながら、あの娘に朝食を与えました。ラム伯母さんはお天気の良い時には、あの娘をつれて散歩に出ました。そして、マリアンヌが少しでも困ったことがあると走り寄ったのはラム伯母さんであり、あの娘がいつもまとわりついていたのも、ラム伯母さんだったのです。

ラム伯母さんが致命的な発作に襲われたその日、伯母さんはマ

リアンヌと一緒に、ディーンさんの子馬の馬車で幼稚園へ行ってきたのです。そしてマリアンヌが喜ぶのを、とても喜んでいたのです。

その夜十時半頃、伯母さんは中風の卒中をおこしたのです。マリアンヌはいつものように、ラム伯母さんのベッドの側の小さなソファアベッドにおり、朝までそこにいました。そして朝、あの娘は習慣の通り、ラム伯母さんのベッドに入りたがりました。しかし、ラム伯母さんには、入れてもらいたがっているその小さな声も、耳にとどかなかったのです。そしてみんながあの娘に、「ラム伯母さんはご病気だったのよ」と言うと、あの娘は「ラム伯母さん、ご病気なのかどうか私に言っよ」と言い続けていました。もちろん、あの娘は私が行くまで、友達の家に行かされていましたが。私達はその不幸な八週間というものを、二つの小さな部屋に閉じこめられていて、小さな娘達はほとんど外へ出ることができませんでした。しかし、子どもの気質にはあのように悪い環境だったので、マリアンヌは小さな良き慰めでした。

ラム伯母さんは最初の卒中の後一週間位して、あの娘に会いたがりました。そこで私はマリアンヌをつれて行きました。しかしその部屋は暗く、陰気でした。ラム伯母さんは頭に蛭をつけており、その頭はまるで亡骸のように、ハンカチで巻きつけられていたのです。マリアンヌは恐かったと思います。私はラム伯母さんが、もういつもの伯母さんではなく(あゝ)目が見えなかったのですが、それに気づくのではないかと心配しました。

次の時には、伯母さんはナイトキャップをかぶせてもらうように頼み、枕の後ろにいちじくを置かせました。それでマリアンヌは納得して、その部屋で遊びました。あの娘は数回行きましたが、あの娘の訪れはいつも、ラム伯母さんを喜ばせました。

五月一日、ラム伯母さんがなくなつた日は、大変うらかな春の日で——それまでのどんよりとしたお天気とは、全く対照的なものでした。

三日に、私達はみなマンチェスターに帰つてきました。そしてその時、私は小さな部屋に長く閉じこもつていたことが、マリアンヌの氣質に影響したのを心配し始めたのです。かわいそうな子ノ、あの娘は氣むずかしく、時には少し頑固になつたりもしました。それなのにベツツイーは行つてしまい、新しい召使いがやってくる、これは子どもにとつて、一つの試練だと思ひます。でもそれは、その時慰めたり手伝つたりしてここに下さつたエリが叔母さんの、忍耐強い優しい扱いですぐになくなりました。

私達はあの娘に、ラム伯母さんは死んでしまつたとは、けつして話していません。というのには、子どもの感覺的な心が、悲しみと大変祝福された考えとを結びつけてしまうかもしれない、と心配するからです。それは、「神の民のために備えられた安息の地へ去りぬ」という考えなのです。しかし私はよく伯母さんの話をしたり、伯母さんの愛と優しさの思い出を生かし続けようとしたり、またラム伯母さんの絵を見せたりします。その伯母さんの風貌は、(それは大変に静まつた純粹な魂にふさわしい、みよ聖堂なので

すが)、あの娘の子どもの記憶の中にもはつきりと、しつかりと据えられるかもしれませぬ。

ある日、私達が話している時にあの娘は言いました。「ラム伯母さんはご病氣だつたわね」「いいえ」と私は言いました。「伯母さんはもう元氣になつて、しあわせにしていますよ」「本当？」と私のいとしい子は答えました。「ああ、よかつた。行つてごきげん伺わなくちや」そしてそれ以後(九月)、あの娘はナッツフォードにいたのです。そしてあの娘は、ラム伯母さんはもうアブ伯母さんと一緒に住んでいなくて、あのお家を出て行つてしまつたの、と私に言つたのです。私は、伯母さんは「人の手によらぬ永遠の天国の家へ移された」のよ、とどんなに言いたかつたことでしょう。でも、私は言わない方が良いと思ひました。あの娘にはまだ、それが理解できないでしょうから。

九月にナッツフォードへ行く前に、あの娘はまた二、三日、素直でない、頑固なことがありました。しかしあちらにいる間、あの娘は非常に賢明な扱いを受けたのでしよう。大変優しく、愛らしい、いい子になつて戻つてきたのですから。確かに、私は、あの娘の氣質はとても優しく、その性質はとても愛らしいとまで言つたでしよう。あの娘の小さな良心も発達して、よく気づき、よく判断できるようになつてきています。

あの娘の罪の大部分は、(ほとんど罪などというものではないのですが)時々頑固の発作をおこす以外は不注意によるものだと思います。しかし私達は、罰に対する恐れを、ただでなく、び

しつと実行しますので、これらの小さな頑固さも、次第に消えてゆくことでしょう。私達があの娘に与える罰は、あの娘を連れて行って、明るい部屋に五分かその位、一人にしておくことです。私達はあの娘に時間の長さを教えますが、あの娘はその時間を、私達が気まぐれには動かされないもの、と思うかもしれません。が、また、泣いて（その部屋を出るといふ）自分の我を通すことでもあります。

一回、たった一回だけ、私達は厳しい罰を用いました。それはある日曜日の夜のこと、五週間程前のことだったと思います。私達はあの娘の知的発達への不安からというより、この長い冬の夜の過ごし方として、あの娘にあの娘の名前の文字を教えようとしていました。あの娘は母音字はみなわかりますが、ただAを言うおうとしないのです。他のものはみな言いますが、一度も後についてAと繰り返して言おうとしないのです。

私達は躍起になってあの娘にそれを言わせようとしたのですが、あの娘は意地になっていました。ミータが眠っていたので、私達は、あの娘が二階へ連れて行かれるといつも出す、大きな泣き声をたてさせたくありませんでした。そこでウィリアムはあの娘がそれを言おうとしない度に、あの娘の手をびしゃりと打ちました。それでとうとう最後には、あの娘はとてもしっかりとそれを言ったのです。今でもはっきり覚えていますが、私達はとてみじめな気持ちが出て、あの娘が寝てしまおうと泣いたものでした。私は、それが正しかったのかどうかわかりません。もし正しくな

かったなら、どうぞ、マリアンヌ、私達を許してね。

それ以来、私達はあの娘がまたお稽古を始めたいという欲求を見せるまでは、それ以上何のお稽古もしていません。そして私は、あの娘が意欲を取り戻してきているように思います。というのは、あの娘は本を手にとって、場合場合によって、「これはA」とか「これはO」とか一人言をいっているからです。

あの娘はどんなにしても、あの娘の年の割に発達が進んでいるとは言えません。でもけつして、何らかの点で発達が欠けているのではないのです。あの娘は、もっとも純然たる真実でさえある、宗教につながってゆくことについては、何も尋ねたことがありません。私はそのようなものが少しでもないかと、待ち構えています。私には、あの娘はお手伝いをするようになり、自分のことは自分でできるようになってきています。自分やまた他の人々のためにちょっとしたことを行いますし、パパのスリッパを持ってあげるなど、お手伝いすることを自分で考えています。今日、彼がでかけようとしていて、あの娘は台所に用事に行っていたのですが、彼が玄関のドアを開けようとしているのを聞きつけると、あの娘はこう叫びながら走って行ったのです。「待って、パパ、パパ、でかける前にあたしにキスしなくちゃいけないわ」

さて、小さなミータの方ですが。今月の五日で十ヶ月になりました。あの娘はマリアンヌよりずっと激しい気質を持っています。それにもっと活発だと思えます。しかし、小さな狭い一室で昼も夜も過ごしたあの八週間が、あの娘の気質に何か影響したのかも

しれないと、時々思うこともあります。あの娘はすべて調子の良い時には、とても明るくて陽気で、またとても人なつこいのです——特にパパとエリザベスに。小さなおしゃまさんは、ママよりもあの二人が好きなのです。あの娘は、あんなに優しくはないにしても、マリアンヌよりずっと賢くなるだろうと思います。もし私がそのやり方さえ知っていたら、働きかけるべき大変すばらしい素質があると確信しています。

あの娘はとても健康ですが、一週間だけ例外がありました。それはあの娘が九ヶ月と二週間位の時でした。マリアンヌがひどい病気をしたのとちょうど同じ頃、同じ歯が生えてきたのです。しかしこれは、その種のものとしても、そんなに激しいものではありませんでした。あの娘はこの二ヶ月かそこらで、四本の歯が生えました。あの娘はマリアンヌの時より背があってほっそりしていて、しかもカーペットの上を上手に転がったり、はいはいができて、ずっと丈夫なのです。あの娘はマリアンヌに似ています。あんなに良い顔色はしていず、笑くほもありませんが、マリアンヌより長いまつ毛をしています。あの娘はつかまり立ちが完全にできるわけではありませんが、それも間近いことでしょう。

あの娘はまだちょっとした芸ができませんが、それは、ただ教えられることがないからなのです。あの娘は私達をみな、名前で区別できます。一、二度、私はエリザベスが、そこにはいないパパやディッキー(鳥)の名を探してごらんなきいと言って、不機嫌なあの娘の注意をそらしているのを聞いたことがあります。こ

れを、私がちゃんとやめさせなかつたのを心配しています。

二人のかわいい姉妹達は、お互いが大好きです。マリアンヌはミータが欲しがるものは何でも、あげてしまいます。時々私が多すぎると思う位に。そしてミータは、何かちよつとしたおもちゃをなくしても、また少し困ったことがあると全く頼りきって、マリアンヌの助けを求めるのです。それにマリアンヌの声を聞くと、あの娘は喜んで声をあげたり、はねたりします。

ああ！ 私はこの愛が続きますようにと望まずにはいられません。私はそれを育むよう、全力を尽くさなければなりません。ああ！ 神よ、この二人のかわいい子らについての、私の良き志をお助け下さい。私はあの娘達の他には、何の支えも持たないのですから。アーメン

(津田塾大学)

註

- (1) ギヤスケル夫人は生後一年足らずで実母と死に別れており、この母方のラム伯母に幼児期、少女期を通じ慈しみ育てられた。
- (2) ナッツフォード在の母方の伯父、ピーター・ホルランドの妻。
- (3) 医用の血吸ヒルで、各国とも昔からその特性を利用して瀉血をおこなった。
- (4) マリアンヌを引き寄せるために、乾しいちじくを隠しておいて与えたのだと思われる。
- (5) ウィリアムの妹。ギヤスケル夫人とは手紙のやりとりなど、とても親しかった。
- (6) 母方の伯母アビゲールのこと。